

## 技術教育研究会と私の歩み

8

佐々木 享

### 技術教育研究会の第1回全国大会の開催

1968年8月7～9日に、秋田県の大滝温泉で技術教育研究会の記念すべき第1回全国大会が開催された。参会者は30名で、経緯上その大部分は東北6県からの人だった。ただしこの集会は、技教研の全国大会とはいうものの、独自の大会ではなく、第17回東北民間教育研究団体合同研究集会（「東北民教研」と略称）の「技術と教育」分科会との合同集会であり、さらにいえば、「東北民教研」の「技術と教育」分科会に技術教育研究会の第1回全国大会との合同という看板を掲げさせて頂いた集会だった、と言う方が実態に近い。大会の実務の大部分は、技教研の会員でもあり秋田のサークルの活動家であった藤原左規夫氏にすっかりお世話になった。

話は急に最近のことになるけれども、98年の岩手の「技術教育を語る会」の『会報』に、藤原左規夫氏がいまでもお元気で東北民教研に参加しておられることを知って、懐かしく思った。

「東北民教研」とは、東北6県の民間教育研究団体が合同で、1952年以来毎年8月に、青森、秋田、福島、宮城、岩手、山形の各県持ち回りで開催している大きな集会である。この種の集会は他に全国に幾つかあるけれども、この「技術と教育」分科会のような技術教育関係の分科会を恒常的に開設している集会は少ない。

技術教育研究会の第1回全国大会を東北民教研集会と合同という形式で開催するという

開催方式を直接に私に示唆して下さったのは、村田泰彦氏だった。村田泰彦氏と言っても技教研の会員は知らない人が多いに違いないし、原正敏氏以外に話したことがない事情なので、少し説明しておく。

村田泰彦氏（1924.2.15～1997.12.10）は、東京大学大学院を卒えて、1959年4月に岩手県教育研究所に赴任された。この岩手時代に、今日も続いている「岩手・技術教育を語る会」というサークルを育てあげるについて大きく尽力された。岩手に赴任される前の東京在住の時代に、多分、私も何回かお目にかかったことがあったと記憶する。しかし、私が村田泰彦氏に親しくして頂いたのは、むしろ私が1961年8月に秋田県の横手で開催された第11回東北民教研集会に招かれてその「技術と教育」分科会に参加し、以後毎年この集会に参加するようになってからだった。村田泰彦氏も同じく毎年、この集会の、いわば私が参加する分科会の隣の家庭科教育の分科会に助言者として参加しておられたからである。

毎年お会いする間のなにかの機会に、技術教育研究会も全国的な団体になるべきだし、また全国的な団体たることをめざすなら、全国大会を開催すべきだと思う、直ぐにはできないというなら、当分はこの東北民教研集会の「技術と教育」分科会との合同という形式で開催したらどうだろうか、と村田泰彦氏が示唆して下さったのである。サークル作りに苦心されてきた村田氏にして言える有り難いことばだった。

私はかねてから実質的な全国団体にしたいと思っていたので、村田泰彦氏の示唆に勇気を得て、この時期には技教研の運営委員会は機能していなかったため、事務局長の原正敏先生と相談の上、東北民教研集会との合同集会という形式に持ち込むことにした。

東北各地の技術科の仲間とは、私は毎年夏の東北民教研集会だけでなく、岩手をはじめ幾つかの県単位の冬の民教研集会にも参加していた関係で、随分親しくして頂いていた。そこで率直にこの村田氏の示唆を仲間たちに伝えると積極的に賛成して下さったので、同じく顔見知りになっていた各県の責任者におずおずと願ひ出ると、夏の集会の前の5月に開催される中間集会の折に開かれる各県代表者会議で認めて下さったのである。

こうして技術教育研究会の第1回全国大会が開催された。

### 村田泰彦氏のこと

村田泰彦氏についてもう少し紹介すると、氏は主として家庭科教育の研究者として知られている方である。若い時に旧制商業学校に学び、苦勞されて北海道学芸大学に進まれ、東大教育学部に編入し、大学院を出てからもいろいろ苦勞され、神奈川大学に落ち着くまで随分あちこちと勤め先を変えられた。苦勞人だったからであろうか、個性的な研究者であっただけでなく、教育研究運動を組織するのは、天才的といえる程に上手だった。岩手の「技術教育を語る会」の組織化を陰で支

えたのも村田氏だったし、後には「大学家庭科教育研究会」を組織し、家庭科教育研究の水準向上に大きな役割を果たす仕事もされた。惜しくも、1997年に逝去された。

### 第6回までの全国大会

技術教育研究会の第6回までの全国大会は以下のように東北民教研集会と合同という形式で開催された。東北民教研集会の日程は毎年8月7～9日に固定されているので、この間の技術教育研究会の全国大会の日程も固定された。

たしか技術教育研究会の第3回全国大会にあたる鳴子集会は、東北民教研集会と全生研や全進研とも合同した2000人を超える大集会以、恐らくその関係で技術教育研究会の大会も「技術と教育」分科会との合同という形式ではなく、東北民教研集会全体との合同という形式に「昇格？」したはずである。私はこの鳴子集会には、何人かの仲間と一緒に、東京から空冷式のバブリカを駆ってでかけたことが忘れられない。

その鳴子集会でお世話下さった高橋豪一さんは、先頃逝去されたと同った。たんに熱心な勉強家だっただけでなく、実際の授業実践に基づいて研究すべきことを強烈に主張する個性的な方だった。合掌。

技教研全国大会の参加者は、第4回あたりまでは、東北各県の人びとが主力であった。その後の山形の温海温泉で開催された1972年の第5回大会あたりから、依田有弘、長谷川雅康の各氏など東北地方以外の人びとが多数参加するようになった。

1997年に東京で開催された技教研全国大会には、懐かしい山形の内田謙三氏が元気な顔を見せて下さった。嬉しいことだった。(続く)

回	年	場 所	参加人数	主たる事務局担当者
第1回	1968年	秋田・大滝温泉	30	[藤原左規夫]
第2回	1969年	福島・岳温泉	30	[河野善市]
第3回	1970年	宮城・鳴子温泉	40	[高橋豪一]
第4回	1971年	岩手・花巻温泉	49	[阿部 司]
第5回	1972年	山形・温海温泉	61	[内田謙三]
第6回	1973年	青森・三沢市	72	[外崎文夫]